

談話分析の単位としての「アクト」

國府方 麗夏

1. 序

発話者が意識的であろうと無かろうと、発話は聞き手に何らかの意味を伝達することになる。それは直接的な表現によることもあれば、間接的な表現によることもある。また、発話しないことも意思伝達的手段になりうる。かくして、意思伝達は様々な手段によって行われる。

談話分析は意思伝達の様々な現象を分析し、その構造の解明を目的としている。そして、その構造が解明されると、意思伝達能力のある者と、そうでない者の相違が明確になり、その比較検討に裏づけされて、効果的な意思伝達の方略を探り出すことが可能になる。近年、言語教育では意思伝達能力の育成が重要視されているため、発話内容もさることながら、その構造の解明こそが重要な課題となっている。

本稿が扱うテーマは談話構造の最小単位である「アクト (Act)」の定義である。談話の構造は幾つかの単位によって階層が形成され、それぞれが密接な関係を持っている。そして、「アクト」はその最小単位にあたるものであり、その階層の基礎を担うものである。そして、これは意思伝達の基礎となる重要な単位である。従って、この定義が不適切であれば、これまでに分析されてきた談話構造を再構築する必要性が生じるのである。しかしながら、現在の「アクト」の定義には曖昧な点が幾つか残されている。

本稿の分析は客観的な観察による手法を主に用いる。つまり、話し手と聞

き手のやり取りから、話し手の発話が聞き手に及ぼした影響を客観的に分析するのである。この分析方法には限界があり万能ではないが、ある程度の結果を得る事ができるものである。確かに、現代科学はまだ未成熟で、話し手や聞き手の心理状況を特定することが極めて困難である。

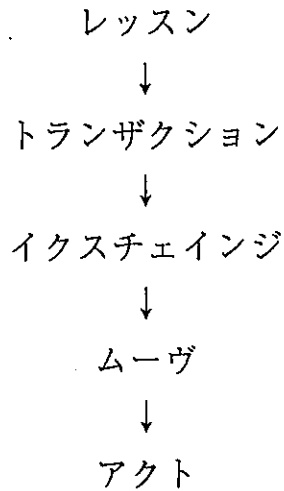
以上の手法を用いて、本稿は次項の 2. で先行文献の研究を概観し、「アクト」の定義についての問題点を提議した。そして、その問題点に焦点を当て、その次の項の 3. で「アクト」の分析の観点とその分析方法について述べた。そして、実際に「アクト」の分析を行い、最終項の 4. で「アクト」の談話構造全体における単位の定義を試みた。

2. 先行文献の研究

この章では三つのテーマについて述べる。第一は現在最も支持されていると思われる談話構造の単位についてである。そして、第二はこれまでの「アクト」の定義についてである。そして、第三章で「アクト」の定義の問題点について述べる。では、最初に、第一のテーマである談話構造の単位について次を見ていきたい。

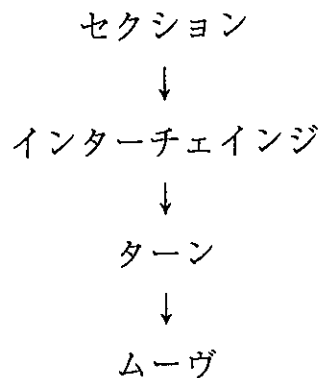
談話分析に用いられる談話構造のモデルは、既に幾つか提示されている。例えば、Sinclair and Coulthard (1975) が Sinclair & Coulthard モデル (以下 SCM)¹⁾ を発表している。SCM では談話を「レッスン (Lesson)」, 「トランザクション (Transaction)」, 「イクスチェインジ (Exchange)」, 「ムーヴ (Move)」, 「アクト」の五つの階層に分類している。その中で最大の単位は「トランザクション」で、次に、「イクスチェインジ」と「ムーヴ」が続き、最小の単位を「アクト」としている。²⁾

表 1：SCM の談話構造



しかし、Owen (1983) は談話構造を「セクション (Section)」, 「インターチェンジ (Interchange)」, 「ターン (Turn)」, 「ムーヴ」の四つの階層に分類をしたモデルを発表している。ここでは最大の単位を「セクション」、順に、「インターチェンジ」, 「ターン」、そして、最小の単位を「ムーヴ」としている。³⁾

表 2：Owen の談話構造



ところが、1990年にOwenはSCMを採択し、それまでの概念を棄却しているため、談話構造の最小の単位も「ムーヴ」から「アクト」に修正されていることになる。そして、現在は表1のSCMが談話構造の基準として広く受け入れられているのである。

次に、第二のテーマである、これまでの「アクト」の定義を見てみたい。Owen (1983) は談話構造の最小単位を「ムーヴ」と定義し、それはそれが持つ機能によって分類されると考えた。Owen はその機能の例として、「挨拶 (Greeting)」、「申し出 (Offer)」、「受諾 (Acceptance)」などをあげている。そして、Owen は「ターン」が「ムーヴ」によって形成されており、「ターン」には「ムーヴ」が必ず一つ以上組み込まれていると主張している。次がその具体的な例である。

例 1

A: hel,lo |'can I ,help you ||

B: oh 'hel,lo| ,yes ||

A: [greeting] - [offer]

↓ ↓

B: [greeting] - [acceptance]

(Owen 1983: 33)

(これは A と B の二人の会話である。)

Owen は A の発話 'Hello' に「挨拶 (greeting)」の機能があり、それに続く発話 'can I help you?' に「申し出 (offer)」の機能があると述べている。発話 'can I help you?' が「申し出」であることは、その後の B の発話にある 'yes' が「受諾 (acceptance)」の意味を持つことからわかる。つまり、A の「ターン」には挨拶の役割と、申し出の役割を果たす二つの「ムーヴ」が存在しているのである。従って、A の発話は二つの「ムーヴ」によって構成されているのである。しかし、B の発話についての分析を見ると、Owen はこれを 'Oh, hello' (「挨拶」) と 'yes.' の二つにしか分類していない。ここでなぜ発話 'Oh, hello' を 'Oh,' と 'hello,' の二つに分割しなかったのか疑問が残る。⁴⁾

次に、Coulthard の分析を見てみたい。Coulthard は「アクト」について次の様に述べている。

そして、我々は「ムーヴ」にも一つの構造があるということを知った。そして、この構造を説明する別の階層が必要になった。これを我々は「アクト」と名付けた。⁵⁾

(We then realized that moves too can have a structure and so we needed another rank with which we could describe this structure. This we labeled *act*. Coulthard 4)

Coulthard は「ムーヴ」に「アクト」と呼ばれる構造が認められると述べている。つまり、これは「ムーヴ」が「アクト」によって構成されているということの意味する。また、Coulthard は「アクト」を談話構造の最小単位であると考えている。同様に Owen も「ムーヴ」という単位を設定したが、それは Coulthard のものと一致していない。

そこで、Coulthard と Owen が定義した「ムーヴ」の違いがどこにあるのか見ていきたい。まず、Coulthard が定義した「ムーヴ」は「発話よりも小さい単位 ('a unit smaller than utterance' 1992:3)」である。ここでの「発話 (utterance)」は「発話は他の誰かが話し始めるまでに、一人の発話者が話す全てと定義されている ('utterance was defined as everything said by one speaker before another began to speak' 1992:2)」と定義されている。つまり、Coulthard は「ムーヴ」を「ターン」よりも小さな単位であると考えているのである。一方、Owen が考えた「ターン」は Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) の会話分析の定義に従ったものである。そこで、その「ターン」の定義を見てみたい。

ターン・テイキングはゲームで駒を動かす順番や、行政職への資金の配当順や、交差点での交通整理の順番や、取引での顧客に対する働きかけの順序、インタビュー、会議、討論、式典、会話での話の順番、等に用いられる。

(Turn-taking is used for the ordering of moves in games, for allocating political office, for regulating traffic at interactions, for serving customers

at business establishments, and for talking in interviews, meetings, debates, ceremonies, conversations etc. Sacks et al. 696)

厳密に言うと、これは「ターン・テイキング (turn-taking)」の定義であるが、ここから「ターン」の定義を導き出すことができる。すなわち、「ターン」は発話の順番を意味し、発話者にその順番が巡ってくると、発話者には発話する権利が認められるのである。つまり、「ターン」は発話者が話し始めてから、他の発話者に順番が移行するまでの間（の発話）を指すのである。ここまでは Coulthard と Owen の考えた「ムーヴ」は一致する。しかし、「ムーヴ」が「アクト」によって構成されるという概念は Owen のモデルには無かった。そして、Owen の考える「ムーヴ」が Coulthard の考える「ムーヴ」と「アクト」のどちらに相当するかも不明確である。

そこで Coulthard の分析を実際に見てみたい。

例 2

T: Can you tell me why do you eat all that food? Yes.

P: To keep you strong.

T: To keep you strong. Yes. To keep you strong. Why do you want to be strong? (Coulthard 2-3)

(これは教師 (T) と生徒 (P) の二人の会話である)

Coulthard は教師の二番目の発話に境界があると述べている。確かにピリオドによる境界は存在する。しかし、そこに幾つの「ムーヴ」と「アクト」があるかは述べられていない。つまり、Coulthard は「アクト」の定義をしたものの、実際にそれを用いた分析例を提示していないのである。そこで、次に Tsui (1993) の SCM を基準に行った「ムーヴ」と「アクト」の分析を見てみたい。

例 3

T: What about this one? This I think is a super one.

Isobel, can you think what it means?

P: Does it mean there's been an accident further along the road?

T: No. (Tsui 1993: 78)⁶⁾

(これは教師 (T) と生徒 (P) の二人の会話である)

ここで、Tsui は教師の最初の発話を一つの「ムーヴ」と考えており、それが三つの「アクト」によって構成されていると述べている。しかし、三番目の「アクト」‘Isobel, can you think what it means?’ を見てみると、これは‘Isobel’ という「呼びかけ」と‘can you think what it means?’ という「質問」の異なる機能によって区別される二つの「アクト」に分割できるように思える。しかし、Tsui はそれを一つの「アクト」として扱っている。また、Tsui が「アクト」だと主張した単位は、「アクト」ではなく「ムーヴ」である可能性が強い。他の例にも同様の疑問がある。次の例を見てみたい。

例 4

T: *What's the next one mean? You don't see that one around here. Miri.*

P: Danger falling rocks.

T: Danger falling rocks. (Tsui 1993: 79)⁷⁾

(これは教師 (T) と生徒 (P) の二人の会話である)

ここでも Tsui は最初の教師の発話が二つの「アクト」で構成されている一つの「ムーヴ」と考えている。Tsui は、教師の発話‘What's the next one mean?’ が「引き出し (elicitation)」, ‘You don't see that one around here. Miri.’ が「教示 (informative)」の機能を果たすと述べている。つまり、‘Miri.’ に「呼びかけ」の機能があり、‘You don't see that one around here. Miri.’ から分離できるとは考えていないのである。

また、日本語学の分野では、Coulthard や Tsui と異なる別の談話構造の単

位が存在する。ここでは「ムーヴ」が談話構造の最小の単位と考えられており、発話は幾つかの「ムーヴ」によって構成されると考えられている。つまり、これは Owen (1983) の概念に従って定義された単位である (中田1990)。従って、日本語学の分野でも「ムーヴ」を、「会話の中で話し手が発するスピーチの最小の機能的な単位 (中田113)」と、機能を基準に境界を定める定義がなされているのである。例えば、中田は次の様な例でそれを説明している。

例 5

A「今日は八日だっけ」

B「そうだよ。なんで？」

A「たしか佐藤さんが八日に来るって言ってたと思うんだけど」

(中田113)

(これは A と B の二人の会話である)

中田は B の発話を一つの発話と考えているが、そこには少なくとも二つの機能があると述べている。具体的に、中田はそれが A の質問に対する「答え」(「そうだよ」と、A に対する「質問」(「何で?」) であると述べている。つまり、中田は機能を基準とした境界を設定することで、この二つの単位を一つの発話から区分したのである。

この機能による区分という概念は大変重要である。Coulthard と Tsui の分析にも最小の単位という概念はあったが、明確に機能的な単位という定義を確立していなかった。一方、中田のモデルには SCM の概念が適応されていないため、「ムーヴ」の談話構造全体に於ける位置付けが明確になっていない。

次に、「アクト」の定義に関する問題点についての筆者の見解を述べる。本稿の議論の中心は、談話構造の最小単位である「アクト」の定義であるが、この定義には曖昧な点があり、談話構造の厳密さが損なわれている。つまり、SCM において、「ムーヴ」が「アクト」で構成され、「アクト」が談話の最

小単位であることは定義されているが、具体的に何が最小であるかその基準が十分に定義されていないのである。これは Tsui (1993) が述べているように、これまで SCM で「アクト」に対して関心がほとんど向けられてこなかったことに原因がある。

しかしながら、既に「アクト」の分類が行われてしまっている。例えば、Francis and Hunston (1992) は主要な「アクト」を八つに分類し、更にそれを細分して、三十二の「アクト」に分類している。また、Tsui (1994) も「アクト」を十一種に分類している。

しかし、これらの分類は適切な「アクト」の定義が成されないまま行われているため、これらが適切な分類であるとは言い切れない。実際に、「アクト」の分類には幾つかのモデルが存在し、統一されていないのである。⁸⁾ しかし、この問題から「アクト」の定義がいかに重要であるかが分かる。

また、Tsui が「ムーヴ」と「アクト」の構造に関する論文を発表した後、この分野における研究は殆ど発展していない。そして、未だに談話構造における「アクト」の単位は完全に一致していない。それは、これまでその厳密な定義が成されてこなかった事にその原因があるのである。こうした問題を解決するためには、まず「アクト」の談話構造における単位の定義が必要である。

3. 「アクト」の分析

この章では三つのテーマについて述べる。一つは「アクト」の分析の視点である。そして、もう一つは本稿の研究の分析方法についてである。そして、最後に「アクト」の分析を行い、本稿の分析方法が適切であるか検証をする。そこで、最初に第一のテーマである、「アクト」の分析の視点について次に述べる。

中田が述べていた、発話単位の境界を機能によって区分する方法は、談話分析には適切に思える。そして、本稿も発話単位を、それが持つ機能によって、発話全体の構造から区分する立場をとる。しかし、機能には様々な種類

が存在する。例えば、談話の機能と文法の機能とは異なる。⁹⁾ 従って、いかなる機能を発話単位の境界の基準にするか、あらかじめ定義する必要があるのである。本稿ではそれを談話機能と呼び、次の様に定義した。

談話機能：発話に備わっている意思伝達の働き。すなわち、発話が聞き手に及ぼす作用・影響のこと。

ここで注意すべきことがある。それは必ずしも一つの「アクト」に一つの機能しかないとは限らないということである。つまり、一つの「アクト」に複数の機能が存在することもあるのである (Francis and Hunston)。

次に、第二のテーマである「アクト」の分析方法について述べる。話し手は原則的に聞き手に対する何らかの目的を達成するために発話する。この目的を達成させるものが機能である。そして、発話は幾つかの情報の塊によって構成される。従って、話し手は機能を持つ幾つかの情報の塊を組み立てることで、意思伝達を行っているのである。つまり、情報の塊は意思伝達の機能の違いによって境界が定められる。

そして、話し手の発話の性質は、話し手自身の判断で決定される。しかし、話し手がいかなる判断をしたかは、話し手自身でなければ判断し難い。だが、その発話がどのように解釈されたかを探ることは可能である。これは話し手に適切な発話を選択する能力が備わっており、聞き手に発話を適切に解釈する能力が備わっている、という前提のものである。この条件の下に限り、発話の機能を聞き手の反応から断定することができる。

そこで、具体的な分析方法について述べる。分析は三つの関連した「アクト」(Ellis 1997, Yule 1996) を用いて行う。それは「発話行為 (以下 LA : locutionary act)」, 「発話内行為 (以下 IA : illocutionary act)」, 「発話媒介行為 (以下 PA : perlocutionary act)」の三つである。これらの「アクト」については Yule が、発話 'I've just made some coffee.' を用いて、具体的に説明している。¹⁰⁾

これを要約すると LA とは話し手が発話した言語形式によって、それ自体

が持つ意味、つまり、言語的意味¹¹⁾だけを聞き手に伝える行為のことである。そして、IAは話し手の意図、つまり、表意と推意¹²⁾を伝達する行為で、発話された言語形式の意味とは必ずしも一致しない。例えば、‘I’ve just made some coffee.’のLAにはこの発話の文字通りの意味しか無いが、IAにはこの他に、「提案 (offer)」や「説明 (explanation)」などの意思伝達の意図があると考えられる。そのため、聞き手がこれを正しく解釈するためには、適切な推論が必要になる。そして、PAはLAとIAが聞き手に及ぼす効果である。従って、聞き手が適切な推論をしたのであれば、その反応からPAを分析することができる。

本稿は発話の機能が話し手の意図、IAによって決定されると考えている。従って、本稿ではLAとPAの関係を考察し、その結果からIAを導き出すという方法をとる。そして、この結果を基に「アクト」の機能を特定し、それを用いて「アクト」の境界の設定を試みる。

最後に、以上の概念を基に実際に分析を行う。ここでは二つの談話資料を用いて、その中の四つの発話に焦点を当て、それぞれの分析を行う。しかし、その前に分析に必要な定義をあらかじめまとめておく必要がある。そこで、次にそれらの定義をまとめる。

まず、最初に「ムーヴ」の定義をする。元々、統語には「文」という単位¹³⁾が存在する。そして、本稿ではこの境界が「ムーヴ」の境界と一致すると考えている。そこで、本稿は次の規則を設定した。

規則 1: 「ムーヴ」の境界は統語の単位である文と一致する。

そして、Coulthard (1992) から、次の規則を定義することができる。

規則 2: 「ムーヴ」は「アクト」によって構成される。

このことから必然的に、「アクト」の大きさが「ムーヴ」を超えることは無い、ということが導き出せる。また、機能に関して、次の様な規則を定義

することもできる。

規則 3: 「アクト」には必ず談話機能が一つ以上備わっている。

このことから、「ムーヴ」に複数の談話機能が認められなければ、それを複数の「アクト」に分類することはできないことになる。

以上の定義を基に、実際に四つの例を取り上げて分析を行う。そこで、最初に例 6 の Lam and Wong (2000) の談話資料を用いて検証をする。

例 6

A: I think Eh...hiking, hiking is the suitable one. Eh ...

Hiking is not expensive and when we're hiking, we can ... we can see the wild life and the natural environment. What is your opinion, B?

B: I'm not really sure that I'd go along with C's suggestion because it could only involve a few students, not the whole school.

A: Can you clarify your point? I don't get your point.

(seeking clarification)

B: I think it is not easily to attract more students to join it.

(clarifying oneself)

A: So you don't agree. *(checking understanding)*

B: No, I don't ... I think swimming is the best activity we should choice because it can attract more student to join it and it is not too expensive for we to ... for we to book swimming pool. Do you agree, C?

C: I agree with you up to a point because swimming is really a very good sport. But booking a swimming pool is really very expensive.

A: 'I don't really understand what you mean' 'Good sport'.

(seeking clarification)

C: Oh! It is healthy and can keep fit. *(clarifying oneself)*

D: I also disagree with B's idea. I think swimming is Eh ...

swimming which only limited in summer.

A: Limited?

D: Limited! Limited in summer, in summer only. And I think some of the money can spend on the urh ...

A: On what? (*seeking clarification*)

D: For example the volleyball and basketball Eh ...

badminton, something like that. Because it's common to student.

(*clarifying oneself*)

(Lam and Wong 248-9)

(ここに登場する A, B, C, D は全員十七歳くらいで、香港で十三、四年間、第二言語としての英語教育を受けた生徒達である。括弧内の斜字体になっているのは、Lam and Wong がこの生徒達の使用した方略を定義したものである)

この引用で注目したいのは、A の発話 'Can you clarify your point? I don't get your point.' である。Lam and Wong はこの発話を「明確化要求 (*seeking clarification*)」と定義している。これは「ターン」によって区切られていることから、「イクスチェンジ」であると判断できる。そして、規則 1 から 'Can you clarify your point?' と 'I don't get your point.' の二つの「ムーヴ」に分割することができる。この発話に対して、B は 'I'm not really sure that I'd go along with C's suggestion because it could only involve a few students, not the whole school.' を 'I think it is not easily to attract more students to join it.' と言い換えて明確化 (*clarify*) し、A の要求に答えている。このことから、'Can you clarify your point?' の IA には確かに要求の機能があることがわかる。

また、'I don't get your point.' には A の要求の動機を説明する機能があると考えられる。つまり、この二つの「ムーヴ」にはそれぞれ異なる機能が備わっていると考えられるのである。しかし、'I don't get your point.' に対する B の PA は存在しないため、この「アクト」の性質を断定することは難しい。

次に、C の発話 'Oh! It is healthy and can keep fit.' を見てみたい。これは A

の発話 ‘I don’t really understand what you mean’ ‘Good sport.’ に対する返答である。Lam and Wong はこの C の発話を「自己明確化 (clarifying oneself)」であると定義している。このことから、この発話は自己明確化の機能を持つ「イクスチェインジ」であると判断できる。そして、これも規則 1 から、‘Oh!’ と ‘It is healthy and can keep fit.’ という二つの「ムーヴ」に分割することができる。そして、これらはそれぞれ機能の異なる「ムーヴ」に分類できる。

しかし、‘Oh!’ にどのような機能があるかをここで判断することは困難である。なぜなら、この「ムーヴ」に対する PA が存在しないからである。同様の理由で ‘It is healthy and can keep fit.’ の機能を判断することも出来ない。しかし、この二つの発話は A の発話と密接な関係を持っている。従って、この二つの発話と A の発話の関係を考察することによって、A の発話の IA を分析することが出来る。

まず、‘Oh!’ の発話から、A の発話が C にとって予期していなかったものであることが分かる。しかし、この発話にどのような機能があるかを具体的に定義することはここでは出来ない。そして、C の発話 ‘It is healthy and can keep fit.’ から、明らかに A の発話に聞き手に説明をさせる機能があることが分かる。従って、A の発話には説明要求の機能があると定義できる。また、規則 1 から、A の発話は説明要求の機能を持つ「ムーヴ」であると定義できる。そして、これは「ムーヴ」が一つしか存在しない「イクスチェインジ」なので、これを説明要求の機能を持つ「イクスチェインジ」であると定義できる。

では、「アクト」の存在はどのように解釈されるのであろうか。ここで機能による分類の概念が役に立つ。そこで、次の第三の例を見たい。

例 7

T: Now then ... I’ve got some thing here, too. Hands up.

What’s that, what is it?

P: Saw.

T: It’s a saw, yes this is a saw. What do we do with a saw?

P: Cut wood.

T: Yes. You're shouting out though. What do we do with a saw?
Marvelette.

P: Cut wood.

T: We cut wood. And, erm, what do we do with a hacksaw, this
hacksaw?

P: Cut trees.

T: Do we cut trees with this?

P: No. No.

T: Hands up. What do we do with this?

P: Cut wood.

T: Do we cut wood with this?

P: No.

T: What do we do with that then?

P: Cut wood.

T: We cut wood with that. What do we do with that?

P: Sir.

T: Cleveland.

P: Metal.

T: We cut metal. Yes we cut metal. And, er, I've got this here. What's
that? Trevor.

P: An axe.

T: It's an axe yes. What do I cut with the axe?

P: Wood, wood.

T: Yes I cut wood with this axe. Right ... Now then, I've got some more
things here ... (etc.) (McCarthy 12-3)¹⁴⁾

(これは教師 (T) と生徒達 (P) の会話である。この資料には複数の生徒が登場しているが、どの発話がどの生徒のものであるかはあらか

じめ特定されていない)

ここで教師の発話 'It's a saw, yes this is a saw.' に注目したい。'It's a saw' と 'this is a saw.' の LA は一見同一に思えるが、'It's a saw' は生徒に情報を提供する「教示 (Informing)」であるのに対して、'this is a saw.' はその「教示」を際立たせる役割を果たしている。なぜなら、'It's a saw' の発話がなされた時点で、既にそれに対する教示をする必然性が無くなっているからである。このことから、この「ムーヴ」には二つ以上の「アクト」があることが分かる。また、'yes' も独立した「アクト」であると考えられる。それは 'yes' に先の二つ「アクト」と同様の機能が認められないからである。つまり、'yes' には教示、あるいはそれを際立たせる機能が認められないのである。この発話に認められるのは、生徒の発話に対する「受容 (Positive)」の談話機能であろう。しかし、これらの「アクト」に対する PA が無いため、これら三つの「アクト」にどのような談話機能があるかは断定できない。そこで、次に PA が存在する第四の例を見てみたい。

ここで教師の発話 'And, erm, what do we do with a hacksaw, this hacksaw?' を見てみたい。この発話に対して生徒は 'Cut trees.' と答えている。つまり、これが PA に相当するものである。これは教師の発話の 'what do we do' に対する発話である。つまり、それ以外の発話に対しては答えていないのである。このことから、一つの「ムーヴ」に複数の「アクト」が存在する時、聞き手はその中の一つの「アクト」に対してだけ、あるいは優先的に一つの「アクト」に焦点を絞って答えると考えられる。そして、ここでの生徒の答えは教師の質問に対するものである。また、状況から、教師は既に質問の解答を知っており、誰かからそれを教えてもらう必要は無かったと判断できる。つまり、あらかじめ分かっている解答を意図的に生徒に答えさせようとしているのである。従って、教師の発話には生徒の回答を引き出す談話機能があると判断できる。

では、その他の生徒の発話に談話機能は認められるであろうか。本稿では 'And' と 'erm' には「受け継ぎ (Turn-passing)」, 'with a hacksaw' には「教示

(Informing)], 'this hacksaw' には「際立たせ」の談話機能があると考えている。また, 'And' と 'erm' を「受け継ぎ (Turn-passing)」の機能を持つ「アクト」として分類したが, 本稿では「受け継ぎ」にも幾つか種類があり, この二つの「アクト」の機能も全く同一のものとは考えていない。つまり, これら一連の発話にはそれぞれ別々の異なる機能が認められるのである。従って, 規則 3 からこの教師の「ムーヴ」は五つの「アクト」に分類することができるのである。

以上の分析から, 「アクト」の単位はそれが持つ談話機能によって区分されるといえる。そして, その発話機能は LA と PA の関係を分析することによって判断ができる。そして, この LA と PA の関係から導き出されるのは IA である。つまり, 発話の談話機能は IA と一致するのである。このことから次の定義が成り立つ。

定義: 「アクト」の単位はそれが持つ談話機能によって区分がなされる。そして, その談話機能は LA と PA の関係から導き出され, ここから導き出されたものは IA の性質と一致する。

4. 結論

本稿は談話構造の単位の一つである「アクト」の境界が, どのように設定されるかについて分析を行った。その結果, 「アクト」はそれが持つ談話機能によって一つの単位として認められるということが分かった。この談話機能とは談話構造に備わっている働きである。つまり, 談話構造が聞き手に及ぼす作用・影響のことである。そして, この談話機能の性質は LA と PA の関係から導き出すことができるということも分かった。

更に, LA と PA の関係から導き出されるものは IA の性質であることも分かった。従って, IA の性質と「アクト」の談話機能は同一のものといえる。つまり, 本稿の分析では, 「アクト」はそれが持つ談話機能によってその単位の境界を決定することができるという結果を得た。

以上が分析から得た本稿の「アクト」の単位についての定義である。今回の分析では「アクト」の単位の定義はしたが、それが持つ談話機能の性質についての分類には取り組まなかった。従って、今後の課題は「アクト」の談話機能を分析し、それを体系化することにある。

註

- 1) このモデルは Sinclair & Coulthard (1975) で発表されているが、Coulthard (1992) に再版が出ており、本稿では再版を参照した。
- 2) 詳細は Coulthard (1992) の 1-5 頁を参照。
- 3) 詳細は Owen (1983) の 37-46 頁参照。
- 4) クリスタル (1992) によれば、こうした発話には感情的、表出的機能があるとされている。
- 5) 訳は引用者の拙訳である。そして、これ以降に登場する本稿の引用文の訳は、全て引用者によるものである。
- 6) この談話資料は Sinclair & Coulthard (1975) の談話資料を Tsui (1993) が用いて分析を行ったもの。
- 7) この談話資料は Sinclair & Coulthard (1975) の談話資料を Tsui (1993) が用いて分析を行ったもの。
- 8) これらの「アクト」の機能の分類をめぐる議論は本論の趣旨とは異なるため、ここでその問題を論じることはしない。
- 9) 談話の機能はその談話全体のコンテキストによって影響を受けるが、文法の機能はコンテキストの影響を全く受けない。例えば、話し手が「暑い」と発話した時、それが持つ文法的機能は、いかなるコンテキストでも、形容詞としての機能しか果たさない。しかし、談話の機能には、聞き手に話し手の現在の状況を教示したり、「窓を開けてほしい」、「クーラーをつけてほしい」という依頼を伝達したり、あるいは「涼しいところへ行こう」という勧誘の役割を果たすものもある。これらは文法的機能から導き出すことができない。この概念は談話分析には重要なものである。
- 10) 詳細は Yule (1996) の 48-9 頁参照。
- 11) 詳細は武内 (2000) の 119-20 頁参照。
- 12) 詳細は武内 (2000) の 119-20 頁参照。
- 13) クリスタル (1992) の 147-8 頁参照。
- 14) この談話資料は Sinclair & Coulthard (1975) の談話資料を McCarthy (1996) が用いて分析を行ったもの。

参考文献

- Collinge, N.E. (ed.). 1990. *An Encyclopaedia of Language*. London: Routledge
- Coulthard, M. 1992. *Advances in Spoken Discourse Analysis*. London: Routledge.
- Ellis, R. 1997. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford UP.
- クリスタル, D 著. 風間喜代三他訳. 1992. 『言語学百科事典』東京, 大修館書店。
- Lam, M and J. Wong. 2000. 'The effects of strategy training on developing discussion skills in an ESL classroom.' *ELT Journal* Volume 54/3. 245-253.
- McCarthy, M. 1996. *Discourse Analysis for Language Teacher*. Cambridge: Cambridge UP.
- Owen, M. 1983. *Apologies and Remedial Interchanges: A Study of Language Use in Social Interaction*. Berlin: Mouton Publishers.
- Owen, M. 1990. 'Language as a Spoken Medium: Conversation and Interaction.' In Collinge (ed.). 1990. 244-280.
- Sacks, H. and E. A. Schegloff, G. Jefferson. 1974. 'A Simplest systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation.' *Language*, Volume 50, 4. 696-735.
- 武内道子. 2000. 「論理形式から表意へ—「ば」構造の場合」
『学習院大学言語共同研究所紀要』第20号 東京, 学習院大学言語研究所。
- Tsui, A. B. M. 1993. 'Interpreting Multi-act Moves in Spoken Discourse'. In B. Mona (ed.); F. Gill (ed.); T. B. Elena (ed.). *Text and Technology: In Honor of John Sinclair*. Philadelphia: Benjamins.
- Tsui, A. B. M. 1994. *English Conversation*. Oxford: Oxford UP.
- 津田葵. 1989. 「社会言語学」『英語学大系 6—英語学の関連分野—』東京, 大修館。
- 中田智子. 1990. 「発話の特徴記述について—単位としての move と分析の観点—」
『日本語学』第9巻11号 明治書院。
- Yule, G. 1996. *Pragmatics*. Oxford: Oxford UP.
- ザトラウスキー, P. 1993. 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京, くろしお出版。

Email: <hot-engine@excite.co.jp>